

「母乳育児奮闘記」

みやぎ母乳育児をすすめる会 監事 塚 武男

第 22 回

生まれたばかりの赤ちゃんは多くの能力を持っている...に違いない、その1

産まれたばかりの赤ちゃんは自分では何も出来ず、こちらが全て助けてあげなければならないというのが世間の常識だと思うが、実は潜在的な能力を結構持っているようだ。「ようだ」というのは赤ちゃんに聞くわけにいかないのでこちらの解釈の問題だからである。

出生直後から赤ちゃんが見せる様々な動きを、私たち「専門家」は何とか反射とか名付け、それに勝手な意味づけをしているが、その大半は赤ちゃんの反応を正しく理解していないと最近つくづく思っている。その一部を本稿にまとめてみたので赤ちゃんに関わる医療者、お母さんは是非ご一読頂きたい。

1.「社交的微笑」とは何か、その意味は？

赤ちゃんは母親のあやす声などの外からの刺激に反応して（恐らく）、2ヶ月頃から笑うようになる。これを「あやし笑い」と呼ぶ。3ヶ月になると「ケケッ」と声を出しながら笑う「声出し笑い」が出来るようになる。ところが赤ちゃんは外からの刺激に反応しない0～2ヶ月の間も何となく、特に睡眠時などに「にやり」とした笑顔を見せる。この外からの刺激に関係ない時期の笑いを私たち「専門家」は「社交的微笑（social smile）」と呼んでいる。

それではこの時期赤ちゃんは何に対して笑顔を見せるのだろうか？

笑顔とは周りをなごませ、赤ちゃんのみならず、老若男女全てへの愛情を掻き立てお互いの関係を良くする作用を持っている。これは他の動物にも同様に見られる共通の現象らしい。では一体なぜ笑顔とはそのような作用を持つのか？このことを必死に研究したフランスのワロイという学者がいたが、結局その理由は分からなかったようだ。

ところでこの出生時の、周囲の刺激には関係なく見せる「社交的微笑」には何か意味があるのだろうか？世間ではあやし笑いのための練習だなどと全く根拠のない説明がされることがあるが、そしてら起きている時も笑えばいいし、いっそのことあやし笑いをすればいいのであってその様な説明は成り立たない。

以下は私の勝手な私見であるが、出生時から見られるこの時期の「笑顔」は、母親を始めとした周囲の人間に対して自分への愛情を掻き立て、自分が愛されようとする働きかけなのではないだろうか。ご存知の通り母性とは生来のものではなく作られていくものであり、そのために、そして母乳分泌、オキシトシンなどのホルモンの活性化にとっても最も大事なものは「母親が赤ちゃんを可愛いと思う心」であるとされている。その為に赤ちゃんは外部からの刺激に関係なく笑顔を見せ「あ、今笑ったよね」、「わー可愛い」という反応を導きだしているのではないだろうか。赤ちゃんは意識し

てはいないだろうが、自分が家族の一員として愛されながら生きて行こうと必死に努力をしているのである。あやし笑いの準備をしているのは、赤ちゃんが笑うということに気づき始める周囲の私たちだと思っている。赤ちゃんが私たちを育てていることを、その笑顔を見ながらつくづくと思うのである。

赤ちゃん頑張れ!! 可愛いよ!!

2.「早期母子接触」を作り出すのは赤ちゃんの自発的な動き

最近のお産の現場では、赤ちゃんが生まれると母親のお腹の上に赤ちゃんをすぐに乗せてあげる。そうすると赤ちゃんはじわじわと母親のお腹をよじ登り、50分程で母親の乳首に辿りつき、乳首をぐいぐい吸い始める。これをカンガルーケア、スキンツースキンコンタクトと呼び名が変わり、現在は「早期母子接触」と呼んでいるが、実は昔は赤ちゃんが生まれれば当たり前に行われていたことを今は大層に名前を付けて読んでいるに過ぎない。

この赤ちゃんの動きは、母親の乳首から発せられるフェロモン様の香りに生まれたばかりの赤ちゃんが引き寄せられ、1mの距離を50分かけて漸く辿りつく説明されている。確かに赤ちゃんの嗅覚が他の動物並みに発達していることについては多くの研究があり、清拭した乳頭としない乳頭では、清拭しない乳頭（フェロモンや母乳の匂いのする）に赤ちゃんは強く吸い付く、とか、他の母親の母乳を塗った乳頭には吸い付かないなど枚挙に暇がない。従って早期母子接触の赤ちゃんの動きは母親の乳頭の匂いに惹かれていることは間違いない。問題は「よじ登って辿りつく」ことである。

生まれたばかりの、特に筋肉の発達が哺乳類で一番劣っているヒトの赤ちゃんは、他の動物は出生と同時に歩くにも拘わらず（子宮外胎児と呼ばれる）、動くことすら出来ない。そのヒトの赤ちゃんが母親の乳首に辿りつくことこそが不思議なのではないだろうか（そう思っているのは私だけかもしれないが）。一応この動きの説明は「新生児歩行」によるものだとされているが、では、この「新生児歩行」なるものを少し考えてみよう。

3.「新生児歩行」とは何か

「新生児歩行」とは、生直後の赤ちゃんの両脇の下を支え、立たせると（あまりお勧めはしないが）、赤ちゃんは膝を左右交代に曲げ伸ばしし、如何にも歩くような運動をする。これを「新生児歩行」と我々「専門家」は呼んでいる。この運動は6週間頃まで続いた後には消失してしまう。この新生児期特有の歩行の様な動きについては、将来の歩行運動への機能を発達させるために存在するとかいう説明がされているが、私はほんとかよ、と言いたくなってしまう。

ヒトの赤ちゃんの筋肉の発達を見てみると、月齢と共に頭から足へと進んでいき、3ヶ月過ぎに首が座って、一歳頃になると立って歩くわけである。この発達が上半身優位から下半身優位に移行するのはずいといから高這いになる7-8ヶ月である。この後に赤ちゃんはつかまり立ち、ホッピング反応、伝い歩き、独歩と進んでいく。下半身優位になり歩行準備が始まる一連の動きに「新生児歩行」が関わっているとはどうしても思えない。しかも「新生児歩行」は6週間で消失してしまうのである。

つまり、歩行運動と呼ぶのは、立位が全く不可能な時期にそれを無視して立位を取らせると、いかにも歩行運動の様に見えるからに過ぎない。赤ちゃんはこの時期に決して立位にはならないし（当然だが）、そうさせる意味も全くない。従って「新生児歩行」と呼ぶことは間違いであると私は考えている。

以下はまたまた私見である。まずこの赤ちゃんの脚の動きは胎内で既にみられている。お腹の中の赤ちゃんが母親のお腹を蹴る「あ、蹴った」というあれである。その脚の蹴る動きがそのまま出生後も続いているのである。生まれたばかりの赤ちゃんは勿論立つことはなくほとんど仰向けで過ごす、仰向けでも腹ばいでもこの脚の蹴る運動によってあたかも這い這いするかのように頭の方に進んでいく。これが時速1mで母親のお腹をよじ登り母親の乳首に辿りつく運動となるのである。確かにその向かうべき方向は母親の乳頭から発せられるフェロモン様の芳香に引かれて行くのだが、それに辿りつこうとする運動は、もし周囲のサポートが無かった場合でも、何が何でもフェロモンの匂いのする乳首に辿りついておっぱいを吸うぞという命をかけた運動なのだと思う。私たちはたまたま母子早期接触としてこの動きを見ているが、この動きはその後も暫く続き、哺乳が安定してくる6週間頃にその役目を終えて消失してしまう、と私は考えている。

そして母親の乳頭に辿りついた後は、何と自分で首を動かしながら母親の乳首を探り当て、そして吸啜する。

この動きも何としても母親の乳首に辿りつき母乳を吸うぞという生への執念、本能であり強い生命活動の表れだと思われる。

この後に起きる吸啜についても生命活動の表れと私は考えているが、随分長くなったので次号にお話しします。赤ちゃんのこのような能力を損なうことなく、赤ちゃん目線を持って母子を支え続ける医療者でありたいものです。

■次回は「赤ちゃんの哺乳の力はどこからくるのだろうか？」と題して赤ちゃんの哺乳行動を探ることにする。

赤ちゃんが出生直後から5ヶ月頃まで見せる「哺乳反射」は乳首を吸うための不随意運動と定義され、以下の3つの反射があることが知られている。

1. 探索反射
2. 口唇反射
3. 吸啜反射

もう一つ「咬反射」というものもあるが、あまり意味はないようである。

赤ちゃんはこれらの「反射」（不随意運動なの？）でもってお母さんの乳首を上手に吸う動きの本体に迫ろうと考えている。